

大山様

昨日は大変お世話になりました。

私自身はだいぶお話もさせていただいたようにも思いますが、実はそれでも全然話し足りていません。そのため、私の真意も十分には伝わっていないようにも思います。

物事には、必ず良い面と悪い面があって、私はなるべく良い面に目を向けたいと思っています。これが私の基本的な姿勢です。

ICT機器の導入に関しては、あまりにも性急にことが進んでいるため、様々な点で問題が起こっていることは確かですが、導入そのものには必然性があり、導入することによるメリットもたくさんあると考えています。特に個別最適化という点においては、大きな可能性があると感じています。「個別最適化」という言葉も文科省・経産省的な言葉であり、あえてここで使ってみたのですが、言葉を変えれば、私たちが教研活动を通してずっと求めてきた「一人一人の生徒に寄り添った」学習ということに他なりません。

ただ、昨日も言いましたように、自分の中に使う必然性が全くなく、上からの押し付けで仕方なく導入しているのではその価値は見えてこないと思います。使えと言われたから仕方なく使っている状態では、結局のところ使うことが目的化され、与えられたコンテンツ（授業内容）を何の工夫もなく、ただ生徒に与えるということになり、当然のことながら自分でコンテンツを創るという意欲も出てきませんし、授業者の「その先生らしさ」は発揮しようもありません。

アクティブラーニングについても全く同じことが言えます。

雁木さんの文章について言えば、「加速する学びから身を引くこと」という題のもとに、アクティブラーニングを批判するには、はっきり言ってしまえば、経験不足なのだろうと思います。この方は2016年に教職に就き、2020年の経験をもとにこの文章を書いています。従来型の授業を十分に行い、それに疑問を感じて自ら授業を変えることの必要性を感じてアクティブラーニングに取り組んだわけではないでしょう。しかも十分にアクティブラーニングのメリット、デメリットを経験できる時間もなかったはず。実際、進学校ではアクティブラーニングの導入を躊躇する場面が多くありますが、その主な理由の一つは「授業が進まない」ということです。私は雁木さんの文章の最後の一段落（4行）には全面的に賛成しますが、そのためにこそ、ワイワイガヤガヤの外面的なActにとられない、真のアクティブラーニング（内面的なActを目指す）を導入すべきなのです。新しい学習指導要領ではアクティブラーニングに「代わる言葉」として「主体的で対話的で深い学び」が置かれていますが、これもこれまで「ぐんま教育のつどい」でずっと追い求めてきたテーマです。確か15、6年前の教研集会で、テーマに「主体的」という言葉を掲げて、対話と深い学びについて語り合っていたと思います。そういう経験を踏まえ

て言えば、新学習指導要領に置かれたあの言葉は、私にとっては何の違和感もない、取り組む必然性のある課題であるということです。

いずれにせよ、内的な必然性も何もなく、押し付けられたものを仕方なくやるのでは何もないものは生まれませんということです。今の学校現場は意味もないこと（私の造語で言えばブルシットタスク）を無理矢理やらされたり、やろうと思ったことをやめさせられる場面が多すぎます。そこで、「教育の自由」ということが問題になります。この言葉は昨日のミーティングで針谷さんが最後に持ち出してくれたものですが、これは本当に私にとっては切実な問題で、私の気持ちを率直な言葉で言い表すなら「こっちは自分なりに一生懸命勉強して、頑張ってる生徒に向き合っているんだから、ごちゃごやうるさいこと言わずに好きにやらせてくれ！」という感じです。ちょっと乱暴な言葉づかいですが、本当にそういう感じです。ただ、ここではこの問題は語り切れないので、また別の機会にじっくり語り合えればと思います。

最後に高校入試改革の問題です。私はここしばらく（11年）定時制にいたり、昨年からは特別支援学校にいたので、今の入試の大変さを実感しているわけではないのですが、2回行う今の入試は端から見ても、その大変さは想像できます。しかもその間、現役の子の教育が疎かにならざるを得ない。これは教員の仕事は何なのかということを真面目に考えた時、問題視されるのは当然のことです。

教員の仕事は「教育」であって「選別」ではない（当たり前のことです）。

この観点に立てば、「入試はやめろ」ということになります。現在の状況においては、これは自分でも「暴論」だと思いますが、実はこのことは既に昨年の夏の要請行動の時、県の高校教育課の方々に話したことです。これは高校再編とも絡みますが、結局のところ「中核校」だとか「拠点校」だとかという形で高校をランクづけする発想から逃れられないのです。ですから、生徒も入試の点数という形でランクづけせざるを得ない。けれども、そんなことをせずとも、「県内どこの学校に行っても、同じように自分にとって必要十分な教育が受けられる」という学校づくりをすればいいのではないかと。そうすれば長い距離の通学をしなくても済むし、保護者の通学費等の支出も抑えられる。群馬県は全国で一番高校生の自転車事故が多いということも聞きますが、それも長い通学距離との関係が全くないとは言えないだろうとも思います。また、教員にとっても、どこの学校で仕事をするかは大きな問題で、人によっては「進学校」で働けないことを苦しんだりもしますが、そういう問題も少なくなるだろうとも思います。かつては、北の方の普通高校からも西の方の普通高校からも「一流」と言われる大学に進学していたのです。ICTが導入され、真の意味で個別最適化された教育ができるようになれば、それはより実現の可能性が高くなっているようにも思います。そうすれば、入試で生徒を「選別」する必要もないのです。

新型コロナのパンデミックを契機として、社会の変化はさらに加速しています。けれどもそれ以前から、気候危機などの問題により社会は変わらざるを得なかったと思います。パラダイムシフトという言葉は何年か前に県の指導主事から聞きましたが、本当にパラダイムシフトが必要であれば、高校の序列化についても再考を促したいと思います。20世紀の初め、物理の世界ではニュートン力学的な定常的な世界から「時間も空間も伸び縮みする」というアインシュタイン的な動的な世界観へパラダイムがシフトしました。そのことを思えば、「入試はやめる」というのは決して「暴論」などではないと思うのですが。

他にも、部活動のことについても言いたいことは山ほどあるのですが、今日はこれくらいにしておきます。

昨日は楽しい時間をありがとうございました。また、皆さんとお話できることを楽しみにしています。

澁谷